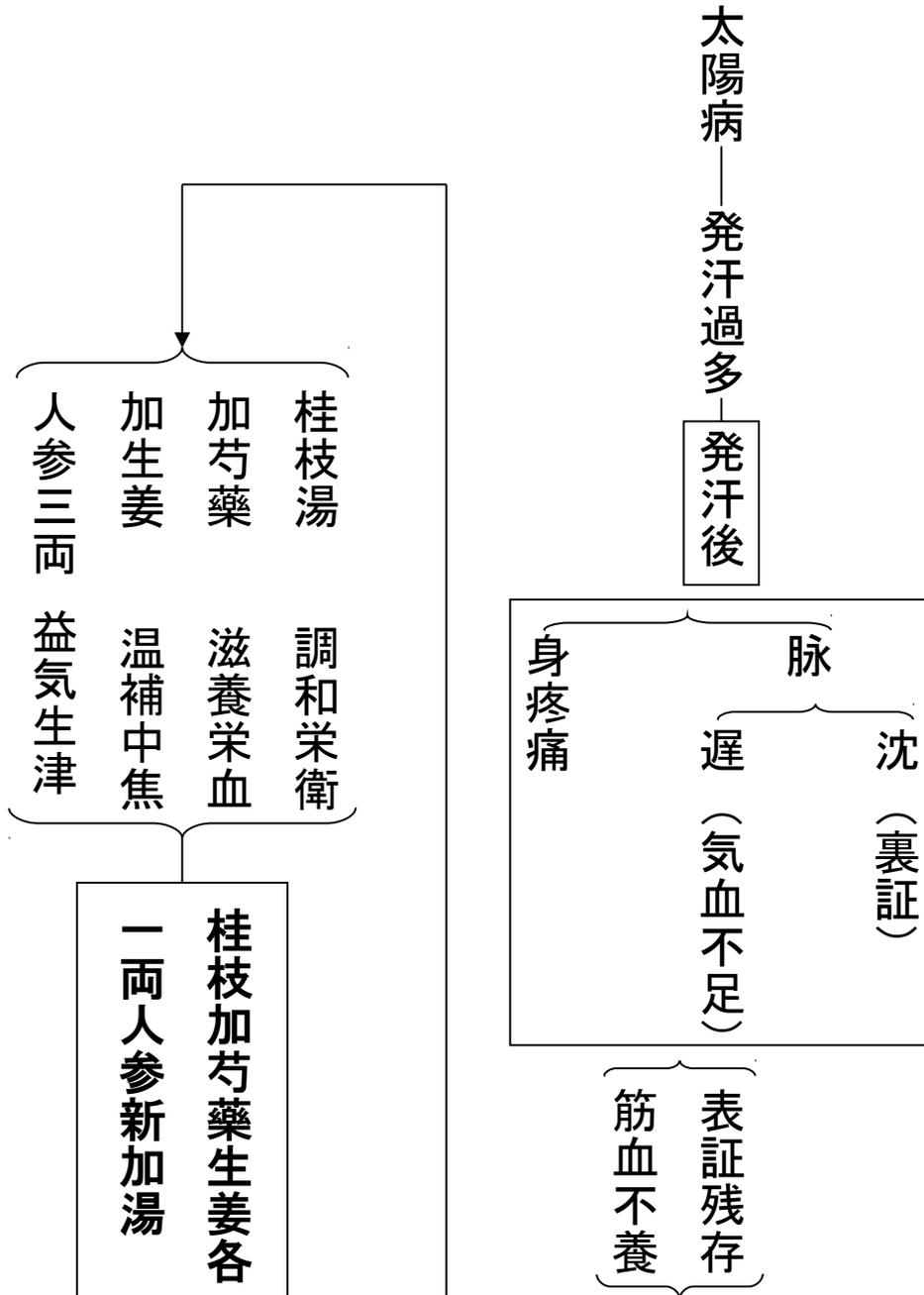


第六二条 発汗後、身疼痛、脉沈遅者、桂枝加芍薬生姜各一両
 人参三両新加湯主之。



桂枝加芍薬生姜各一両 人参三両新加湯の証

方意

太陽中風証の治療で発汗させ過ぎたため、気血が損傷されて筋肉痛を起こしたものである。この筋痛は太陽病の表証に因るものではない。

弁証のTrias

- 1) 多量の発汗後
- 2) 筋肉痛
- 3) 脉は浮ではなく沈遅

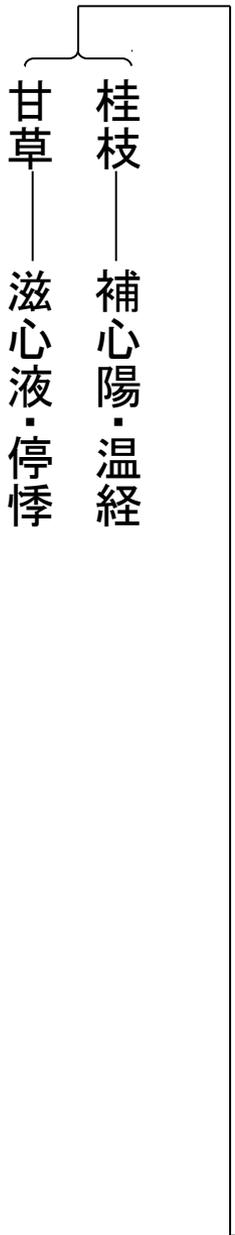
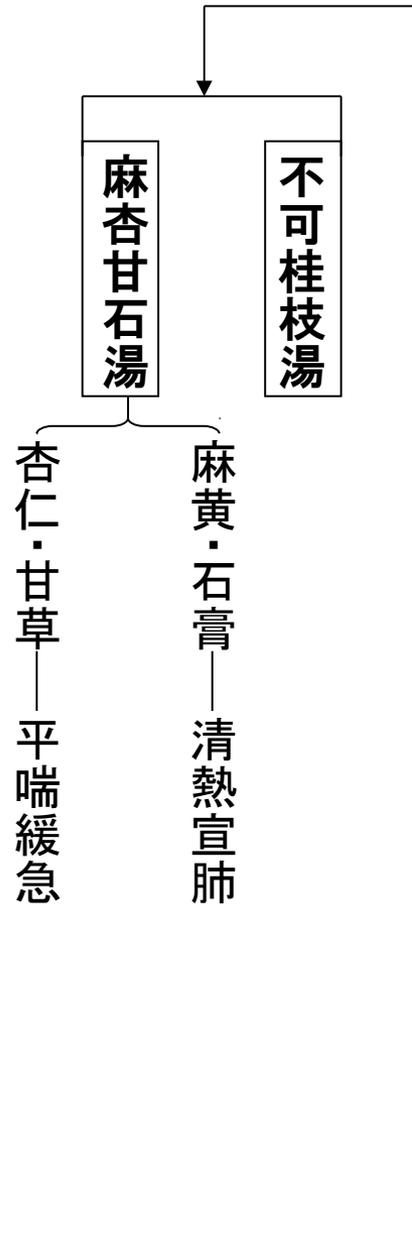


第六三条 発汗後、不可更行桂枝湯。汗出而喘、無大熱者、可與麻黄杏仁甘草石膏湯。

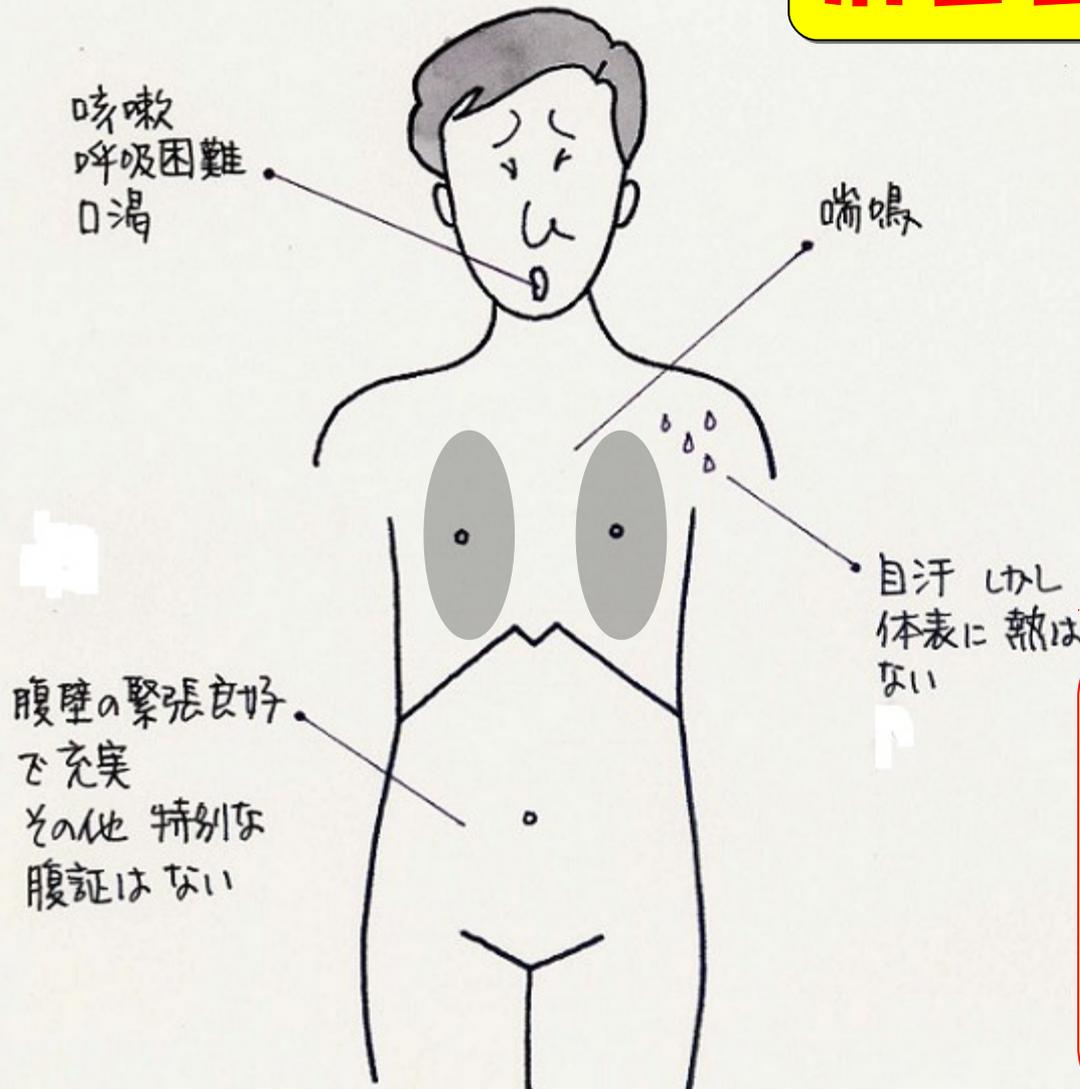


第六四条 発汗過多、其人叉手自冒心、心下悸欲得按者、桂枝

甘草湯主之。



麻杏甘石湯の証*



麻黄劑といわれるものの範疇に
属するものの代表的方劑
麻黄は表邪を發散、水毒の
停滞を追い 気管支を拡張し
喘咳を治す。
病位は少陽病（裏熱実証）
脉は 浮 數
舌は 乾燥し 白苔がある

弁証のTrias

- 1) 痰は少なく烈しい咳
 - 2) 発汗、自汗
 - 3) 体表は無熱
- 肺の
実熱

麻杏甘石湯(傷寒論)

- 君薬 麻黄 4.0グラム: 辛苦温。宣肺平喘、肺經の専薬
で発汗解表、咳逆上氣、痰吼氣喘を治す。
- 臣薬 石膏 10.0グラム: 辛甘温。 清熱生津、氣分証の
実熱を清し、肺火を降し津液を生ず。
麻黄と石膏で肺熱を清泄して喘咳を平ぐ。
- 佐薬 杏仁 4.0グラム: 辛苦温。麻黄とは相使の関係、
寒邪を除き、止咳定喘祛痰する。
- 使薬 甘草 2.0グラム: 甘平。急迫を除し、諸薬を調和。

太陽病肺熱証と麻杏甘石湯

- 1) 病邪と部位：太陽傷寒の寒邪が表裏の関係にある肺を侵襲する。
- 2) 病理機序と症状：肺に侵入した寒邪は熱と化して肺熱に変わる。
 - 肺熱が肺の宣発作用を失調させて喘咳粘痰。
 - 肺熱が皮下の津液を体表に押し出して発汗。以上により「汗有リテ喘ス」という症状を呈す。
- 3) 麻杏甘石湯：麻黄と杏仁で肺気を降し鎮咳定喘。
石膏と麻黄は肺熱を清泄し止汗利尿。

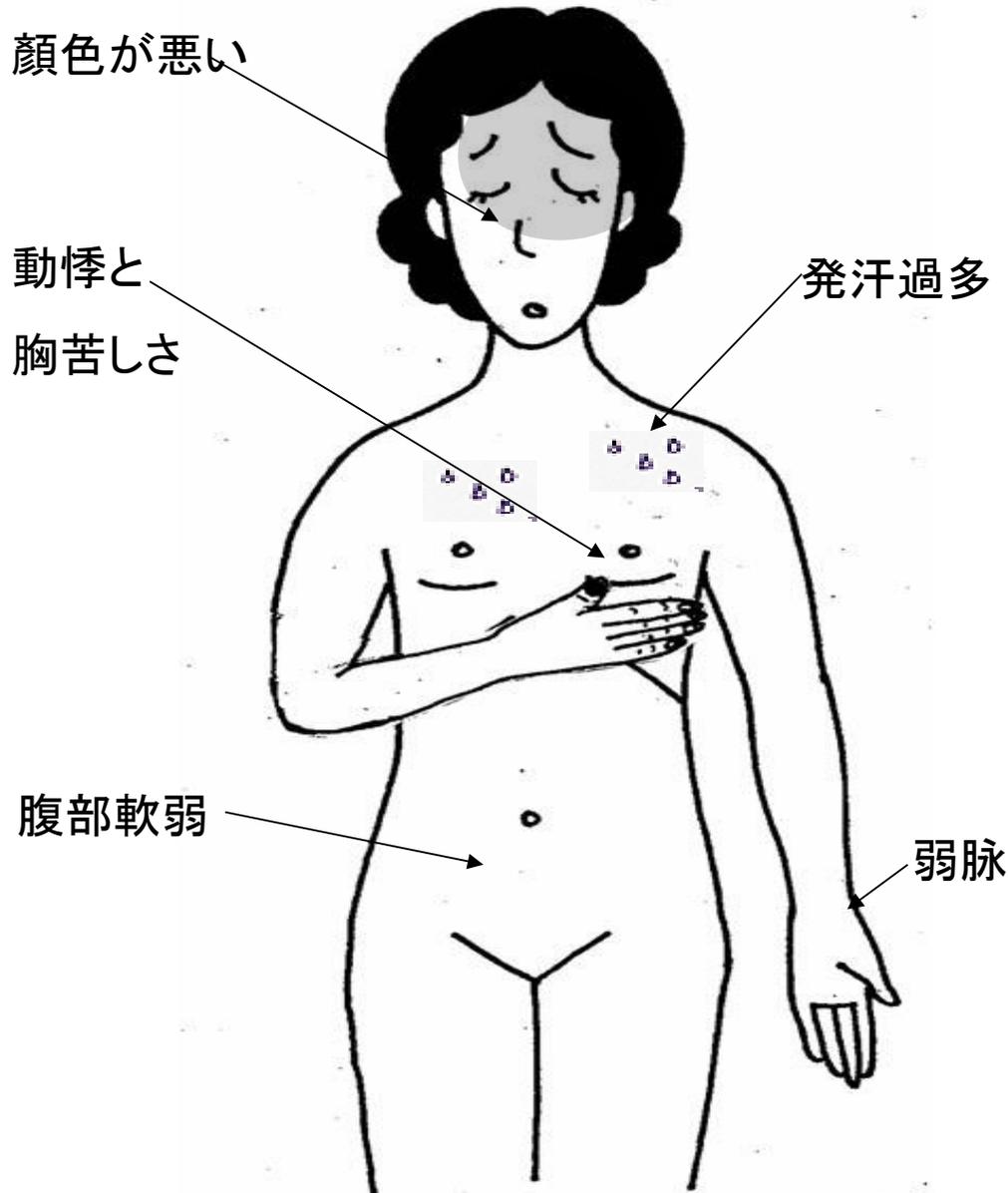
麻黄剂使用の鑑別

汗無くして喘す(寒咳)
麻黄湯、小青竜湯

汗有りて喘す(熱咳)
麻杏甘石湯、五虎湯

汗無くして煩す(熱鬱)
大青竜湯(エキス剤は麻杏甘石湯+桂枝湯)

桂枝甘草湯の証



方意

太陽病を発汗させ過ぎた結果、汗は心の液であるから、多量の発汗に困って心陽が虚し動悸や胸騒ぎを覚えるようになったものである。

方義

桂枝の辛は肺に走り気を益し、また心気を益す。

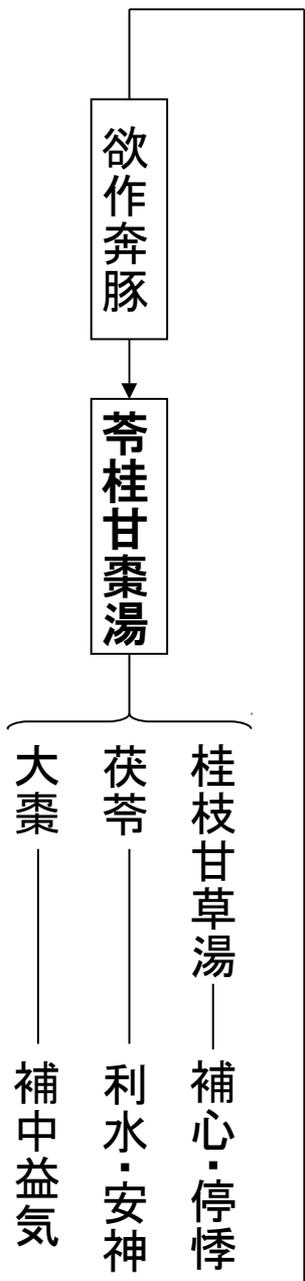
甘草の甘は脾に入り中を緩む。

弁証のTrias

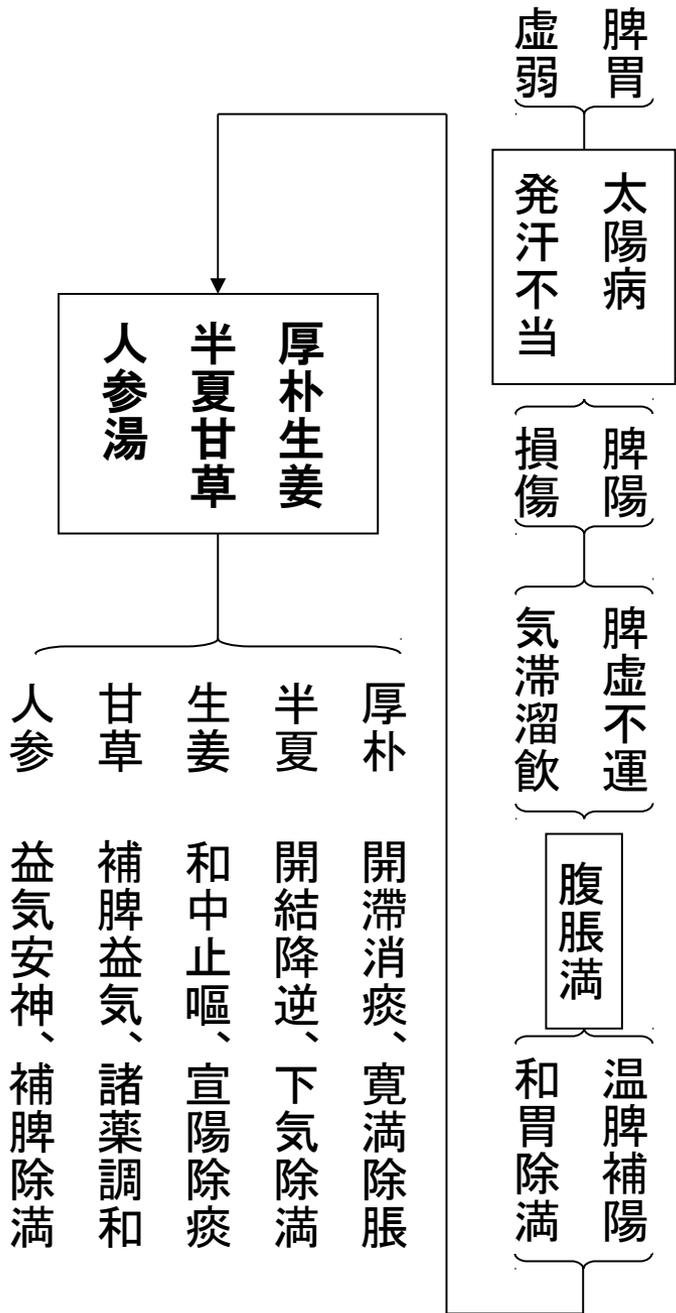
- 1) 自汗
- 2) 動悸、胸苦しさ
- 3) 陽虚、弱脈

第六五条 発汗後、其人臍下悸者、欲作奔豚、茯苓桂枝甘草大

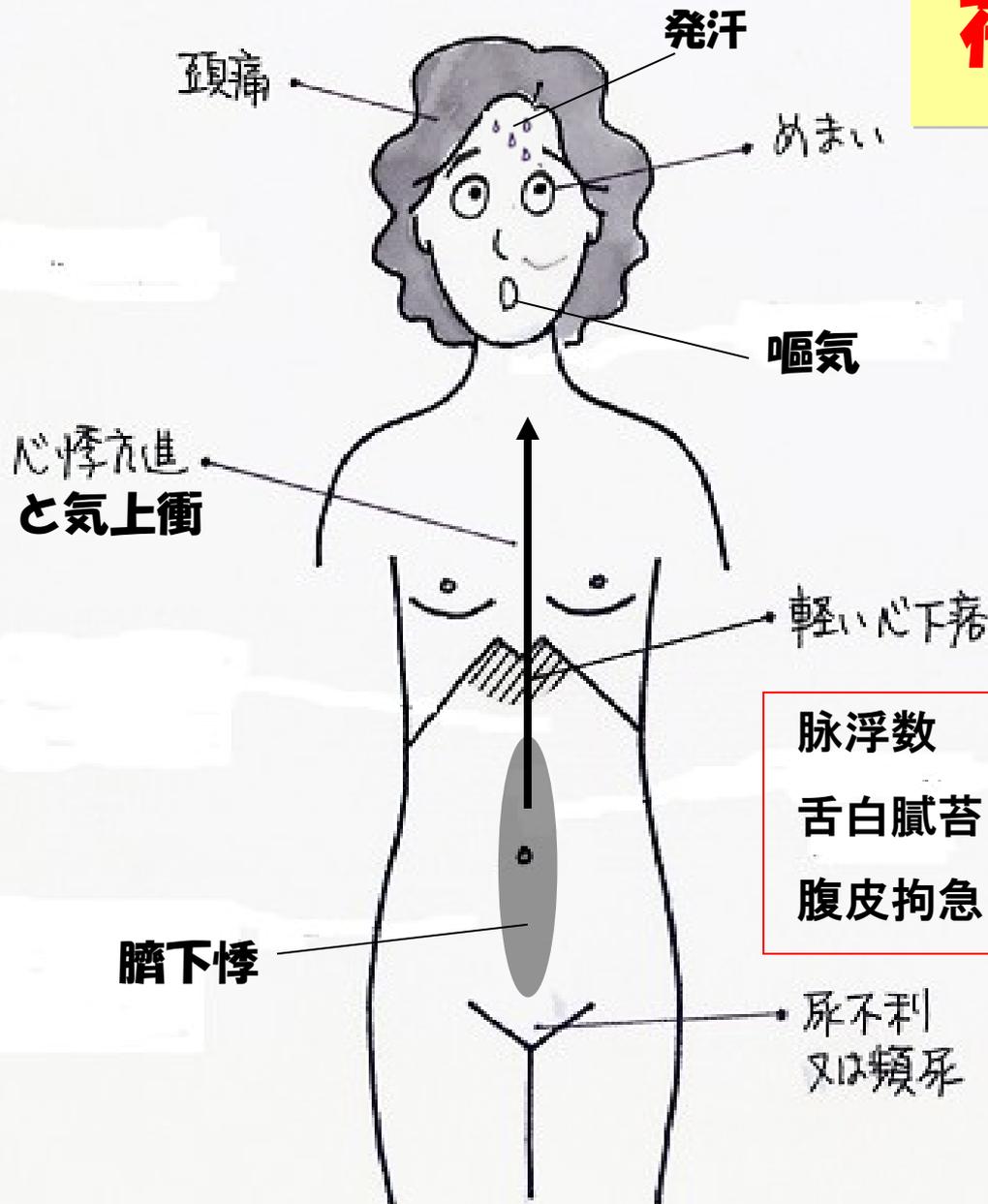
棗湯主之。



第六六条 発汗後、腹脹滿者、厚朴生姜半夏甘草人参湯主之。



茯苓桂枝甘草大棗湯



方意

太陽病を発汗させ過ぎた結果心の陽氣が虚し、下焦の腎水を制御できなくなり、水飲が上衝して奔豚を生じようとしている状態である。

弁証のTrias

- 1) 下腹部の動悸
- 2) 強い不安感
- 3) 発汗、眩暈、呼吸困難

厚朴生姜半夏甘草人参湯

気分憂鬱

食欲不振
悪心嘔吐

方意

元来脾胃虚弱な人が太陽病で、発汗が不適當であった為脾胃を損傷し、気虚が原因で痰飲の停滞と、同時に気滞も生じてガスで腹部が脹満するに至ったものである。

胸の痞え

心下痞満

腹部膨満感
(腹は軟弱)

脉弦遅
舌質淡、白膩苔
腹部虚満

弁証のTrias

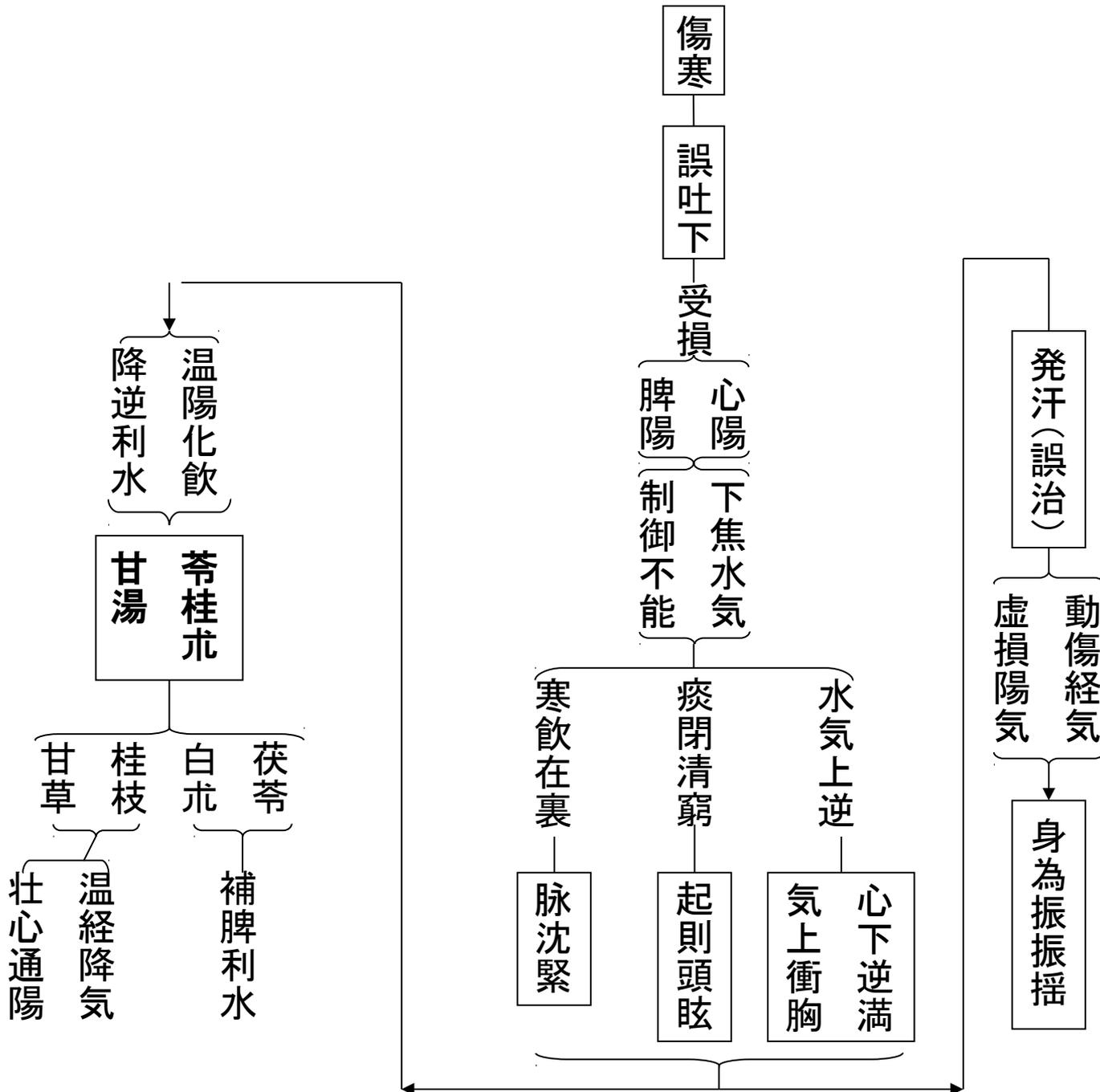
- 1) 胃腸が弱い体質
- 2) 腹部膨満(虚満)感
- 3) 食欲不振、嘔気

便通不順

第六七条 傷寒、若吐、若下後、心下逆滿、氣上衝胸、起則頭眩、

脉沈緊、發汗則動經、身為振振搖者、茯苓桂枝白朮

甘草湯主之。



茯苓桂枝白朮甘草湯

*

方意

太陽病を誤治で吐下した結果、心と脾の陽氣を損傷して、下焦の水飲を制御できなくなって、下焦の水気が上衝して以下の諸証を呈す。

主証：心下逆満（心下膨満感）

氣上衝胸（動悸・息苦しさ）

起則頭眩（起立性眩暈）

客証：身体動揺、冷え頭重、尿不利

脉は沈緊、舌は淡白胖大、滑苔。

弁証の要点

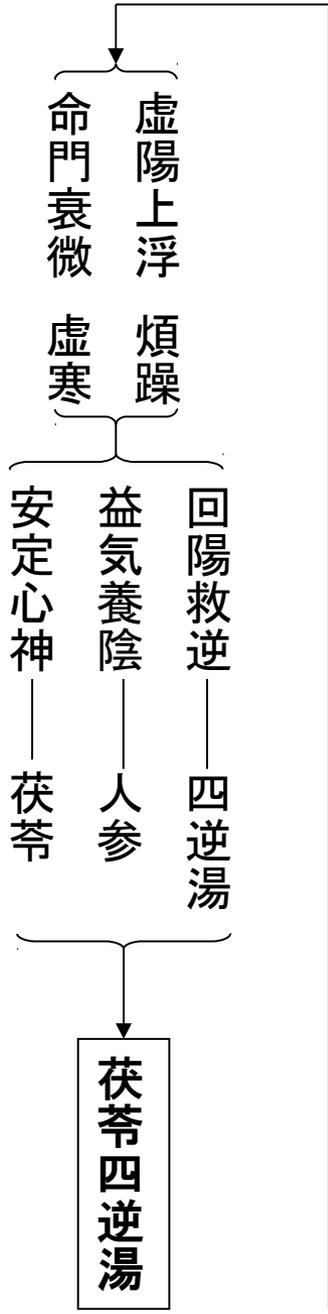
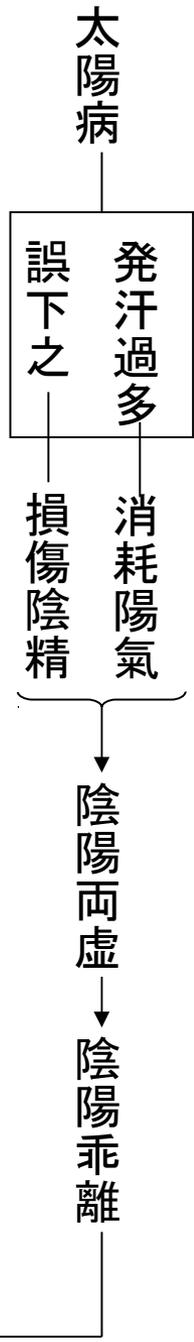
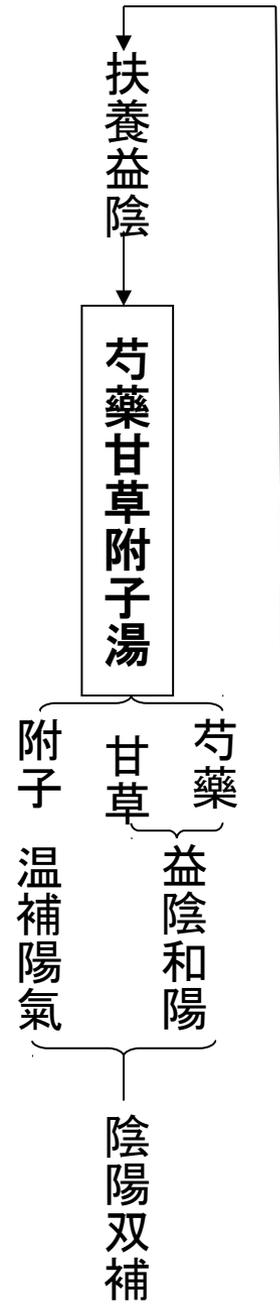
- 1) 動悸、眩暈、息苦しさ
- 2) 冷え、頭重、脉沈緊



第六八条 発汗病不解、反悪寒者、虚故也。芍薬甘草附子湯主之。



第六九条 発汗若下之、病仍不解、煩躁者、茯苓四逆湯主之。



芍薬甘草附子湯



方意

太陽病を発汗させ過ぎて、体表の衛陽が虚し、悪寒が増強して手足が冷えると同時に、津液も損傷して筋肉が養われず四肢や腹筋の痙攣、腹痛などが生じる。

キーワードは冷えと痙攣。

処方

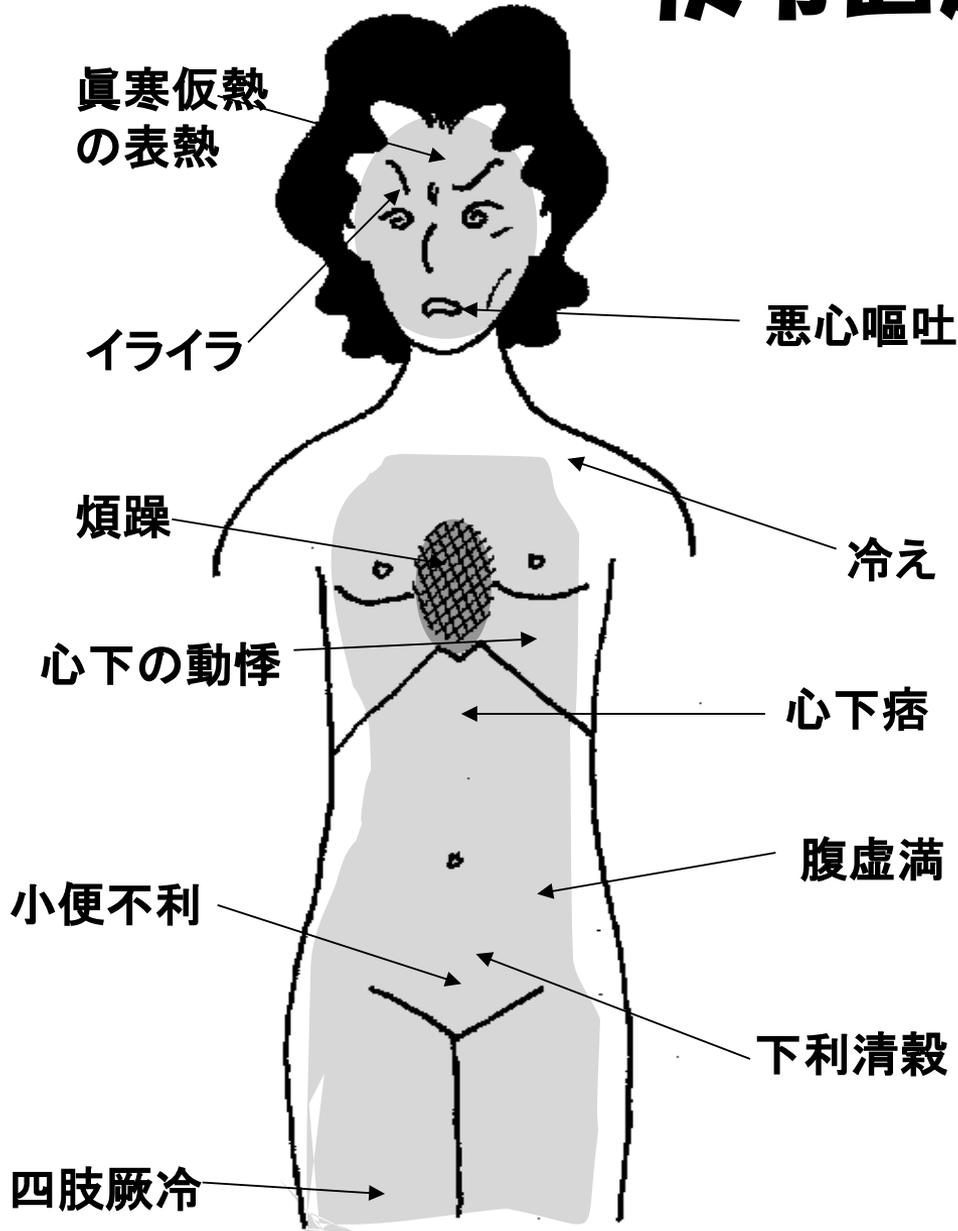
芍薬 3両(6.0グラム) 荣陰を滋養。

甘草 3両(6.0グラム) 急迫を徐す。

附子 1枚(1.5グラム) 陽氣を扶助。

芍薬甘草湯エキスに修治附子1.5グラムを加えて可。

茯苓四逆湯の証*



方意

太陽病に不適當な発汗を行い、更にその後、誤って瀉下を行った結果、発汗で陽氣を消耗し、誤下によって陰精を損傷して病人を陰陽両虚に陥らせ、陰陽が乖離して虚陽上浮に因る煩躁を生じたものである。

脉は沈で微弱。

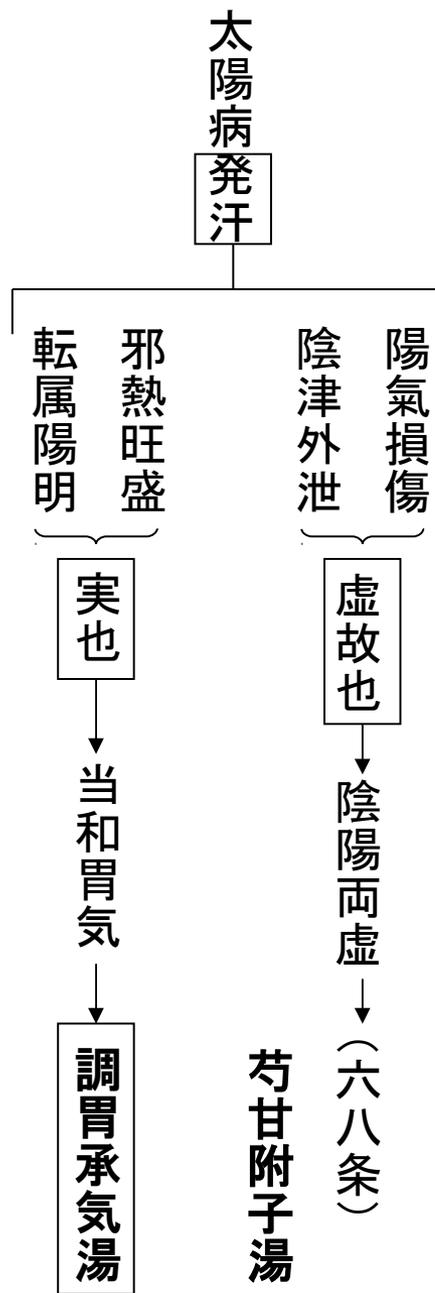
舌は舌質淡白、滑苔。

腹は虚満、心下痞と臍上の動悸。

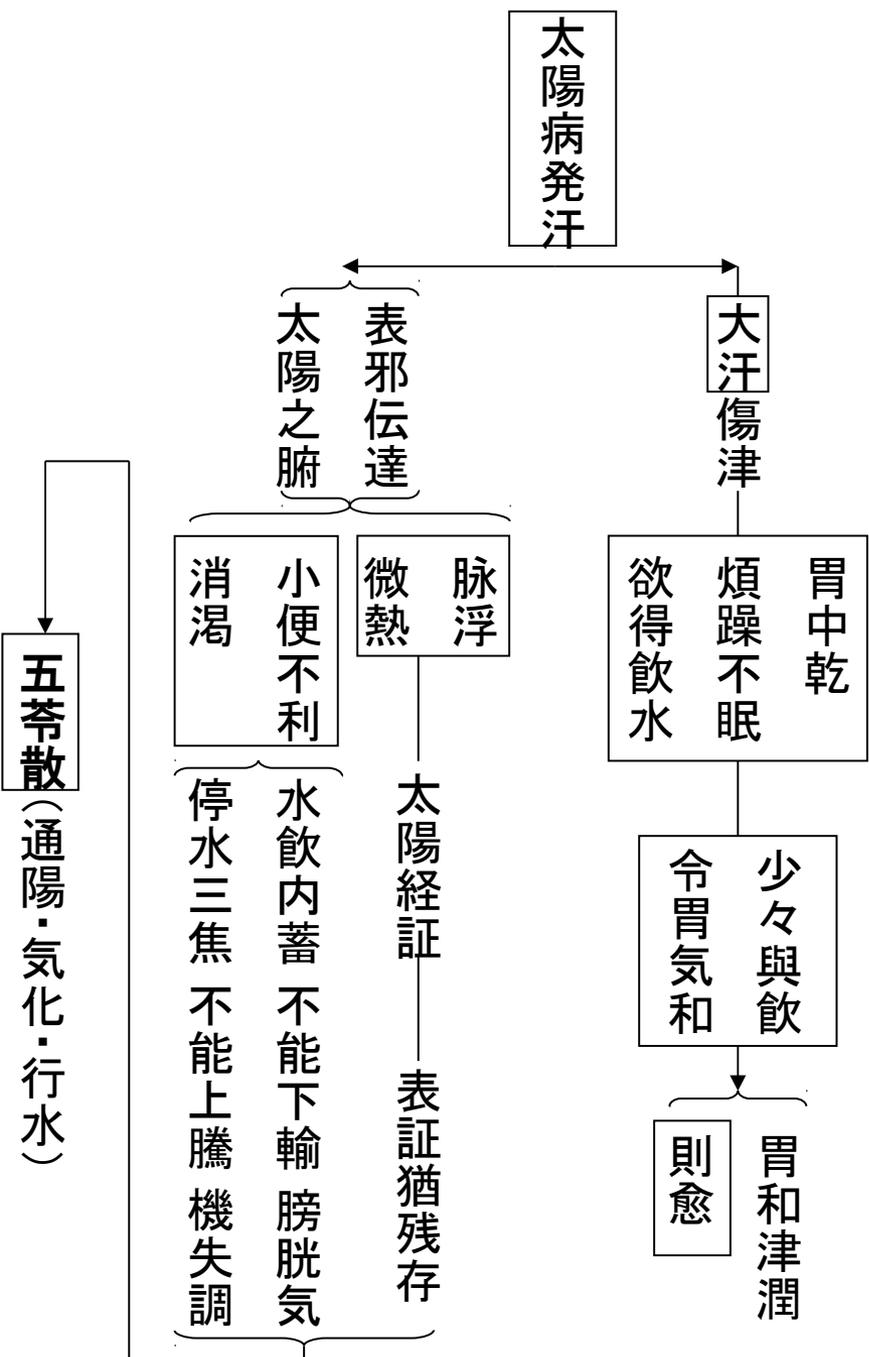
弁証のTrias

- 1) 煩躁(イライラ、不眠、焦燥)
- 2) 裏虚寒(体の芯は寒証)
- 3) 虚陽浮越(仮の熱)

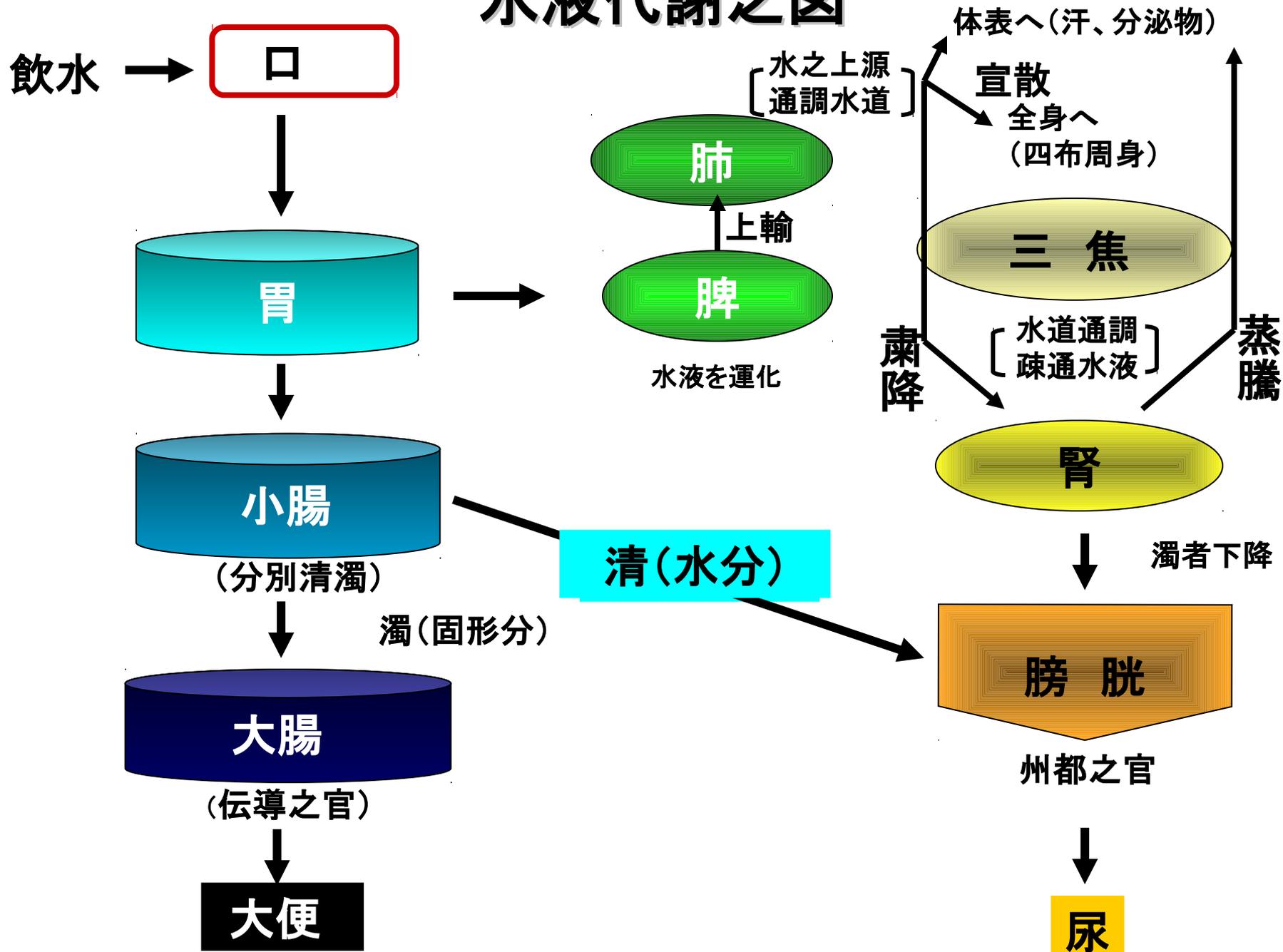
第七〇条 発汗後悪寒者、虚故也。不悪寒、但熱者、実也、当和胃氣、與調胃承氣湯。



第七一条 太陽病、発汗後、大汗出、胃中乾、煩躁不得眠、欲得飲水者、少々與飲之、令胃氣和則愈。若脉浮、小便不利、微熱、消渴者、五苓散主之。



水液代謝之図



五苓散の証*

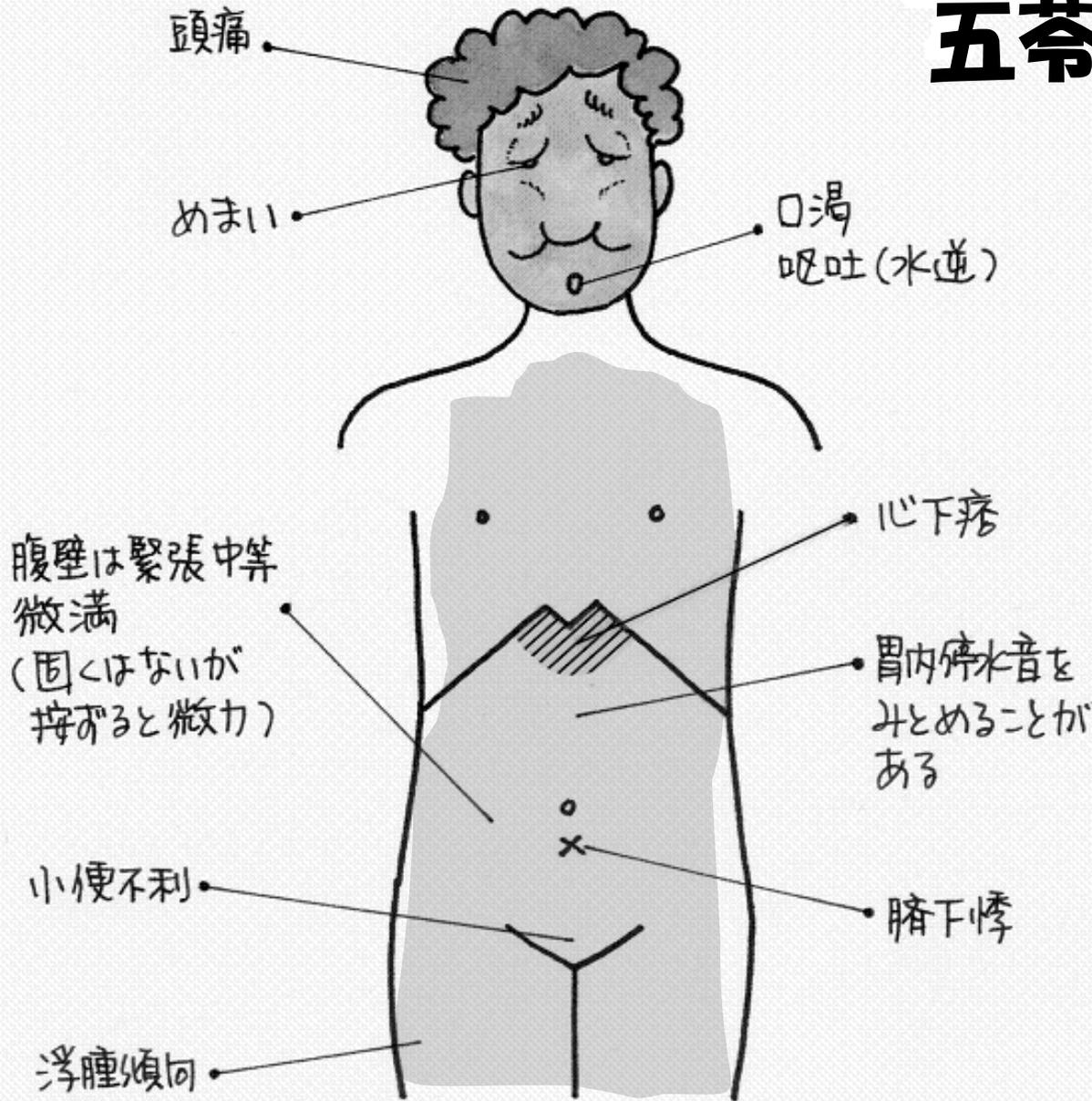
方意

太陽病を発汗させ過ぎて、太陽経の腑である膀胱の気化作用を失調させて、発熱は残存、水飲内蓄、煩渴、嘔吐、尿不利などを呈す。

本方は桂枝で残余の表証を解すと共に、通陽気化して利尿し、他の4薬で滲湿利水する。

弁証のTrias

- 1) 強い口渇
- 2) 尿量減少
- 3) 浮腫傾向



茯苓甘草湯

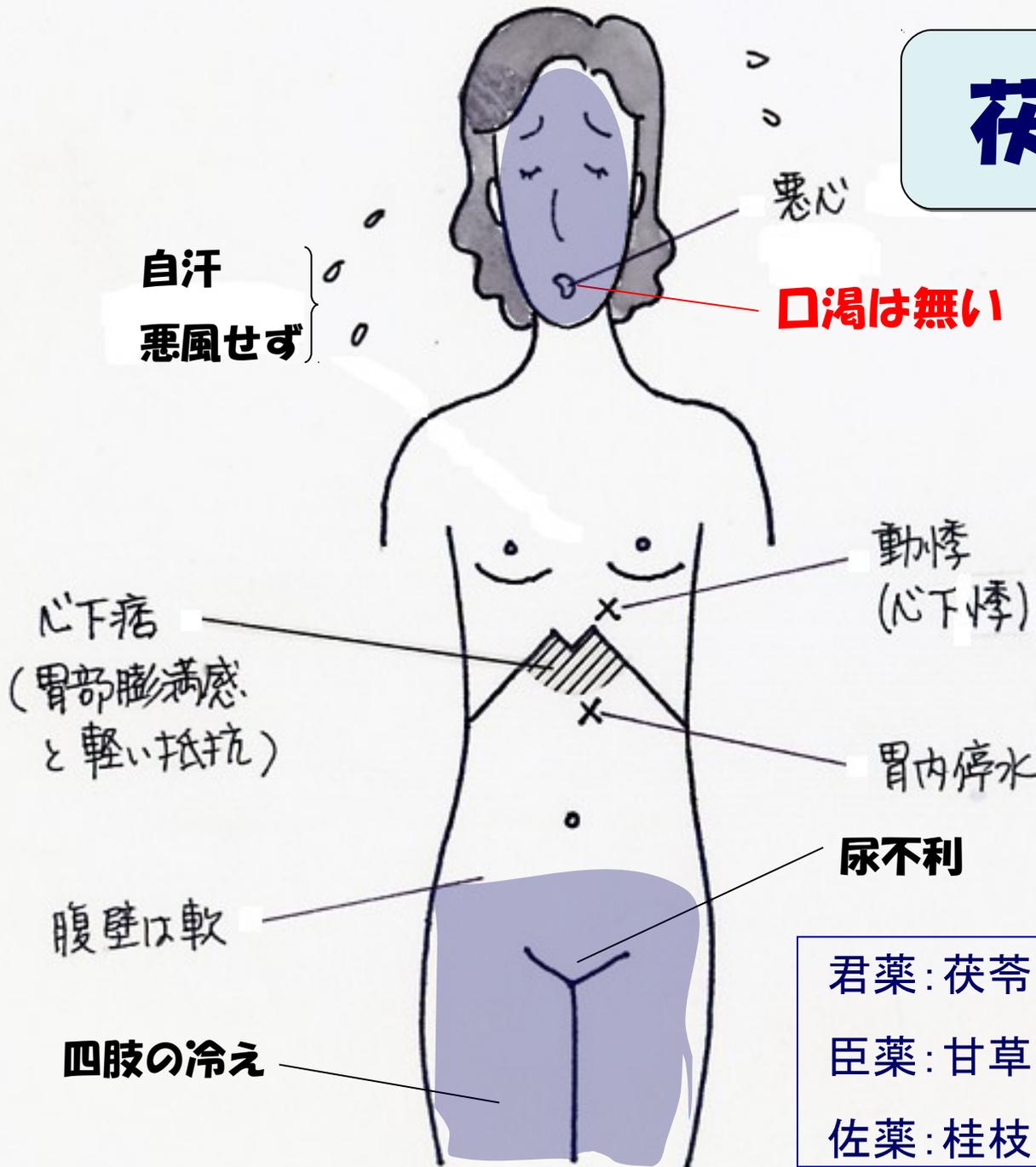
方意

太陽病を発汗させた後に脾胃の陽氣が傷けられて、脾の水飲を吸収の機能が失調して胃内に水飲が貯留停滞して、自汗、尿不利を呈す。膀胱の失調ではないので、三焦の水飲停滞はなく、煩渴は生じない。

君薬：茯苓、益津、和胃、利尿。

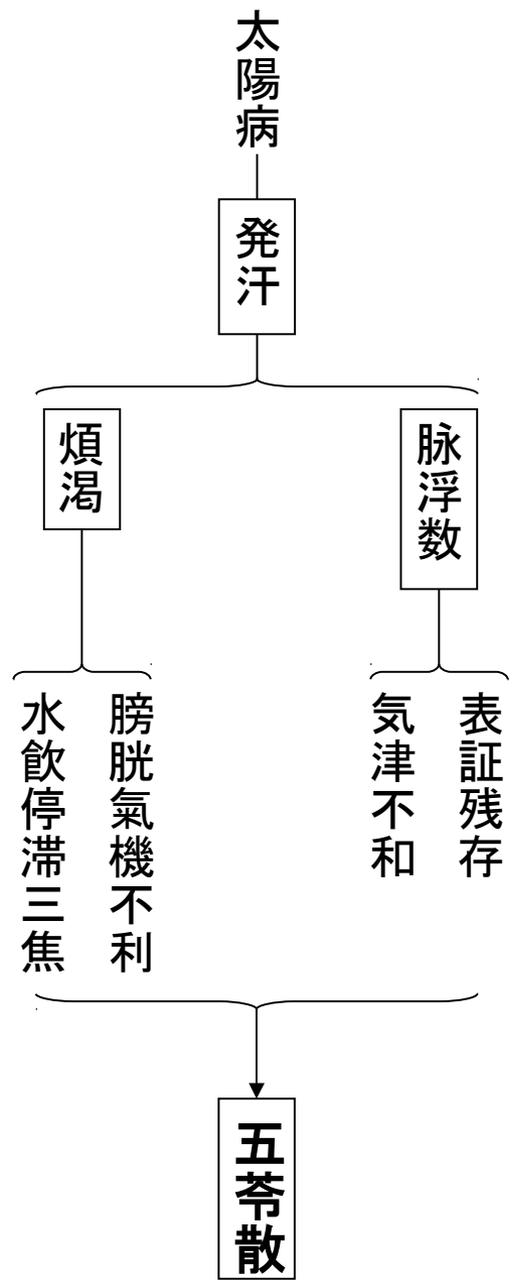
臣薬：甘草、補脾、水飲吸収を正常化。

佐薬：桂枝、温経、固表。使薬：生姜。

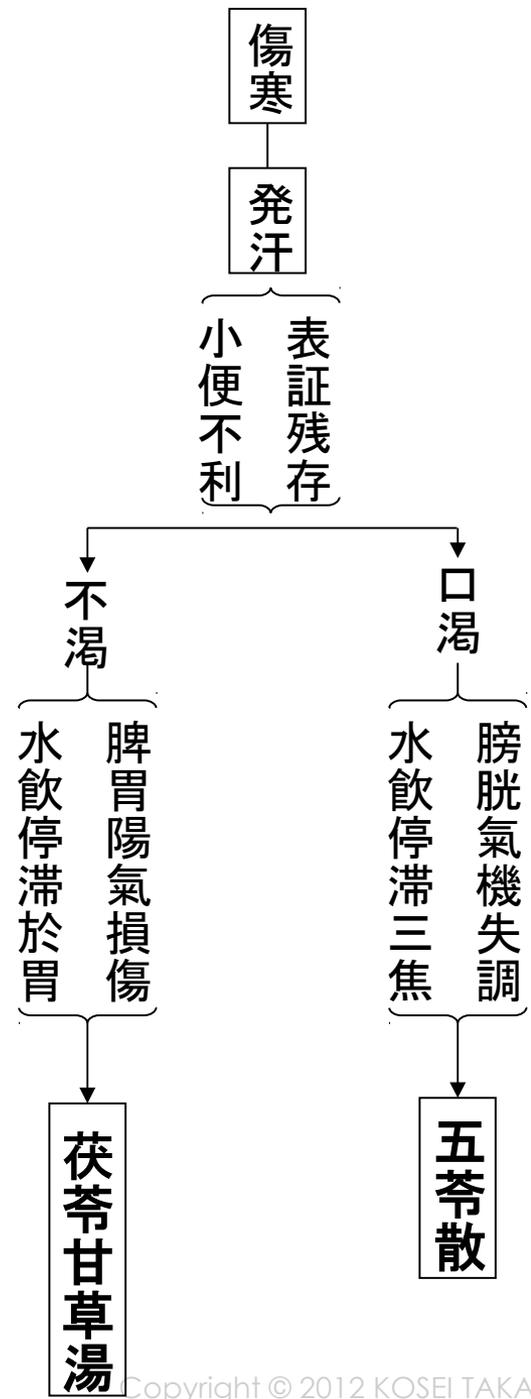


(太陽蓄水証)

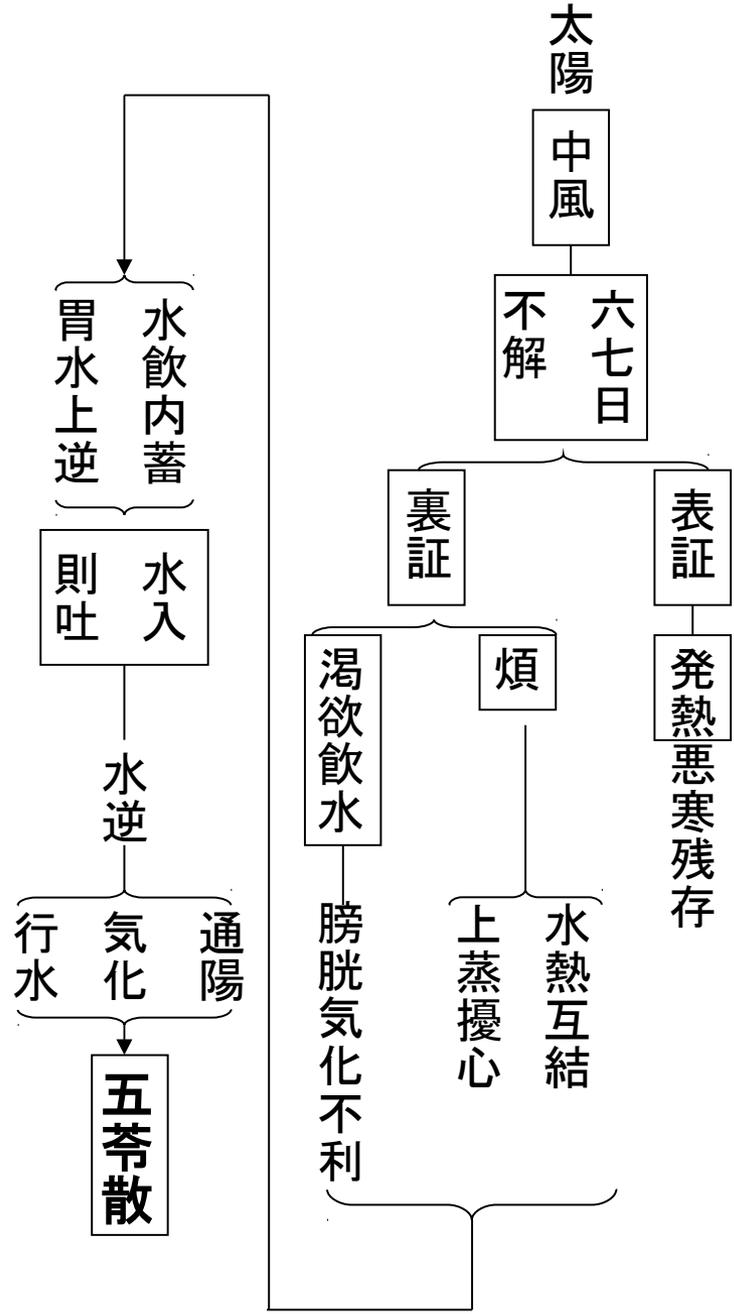
第七二条 発汗已、脉浮数、煩渴者、五苓散主之。



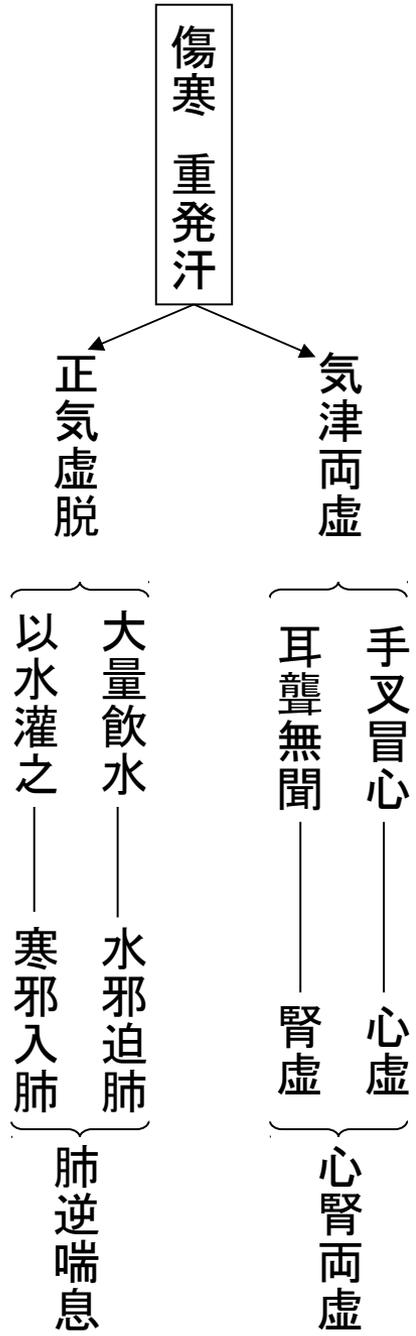
第七三条 傷寒、汗出渴者、五苓散主之。不渴者、茯苓甘草湯主之。



第七四条 中風、発熱六七日不解而煩、有表裏証、渴欲飲水、水入則吐者、名曰水逆、五苓散主之。



第七五条 未持脉時、病人手又自冒心。師因教試令咳、而不咳者、此必兩耳聾無聞也。所以然者、以重発汗、虚故如此。発汗後、飲水多必喘、以水灌之亦喘。



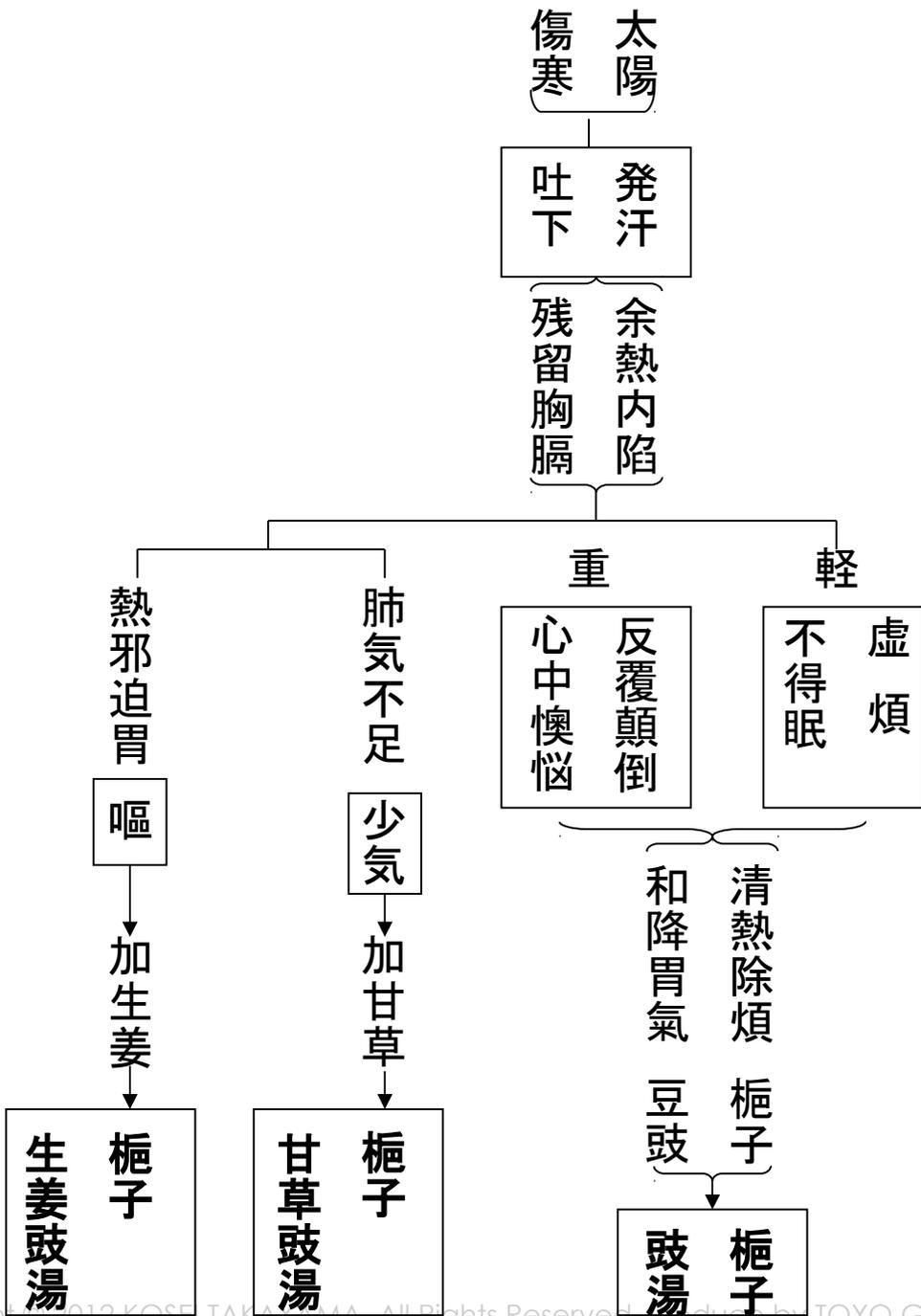
（梔子豉湯類）

第七六条 発汗後、水薬不得入口、為逆。若更発汗、必吐下不止。

発汗、吐下後、虚煩不得眠、若劇者、必反覆顛倒、心中

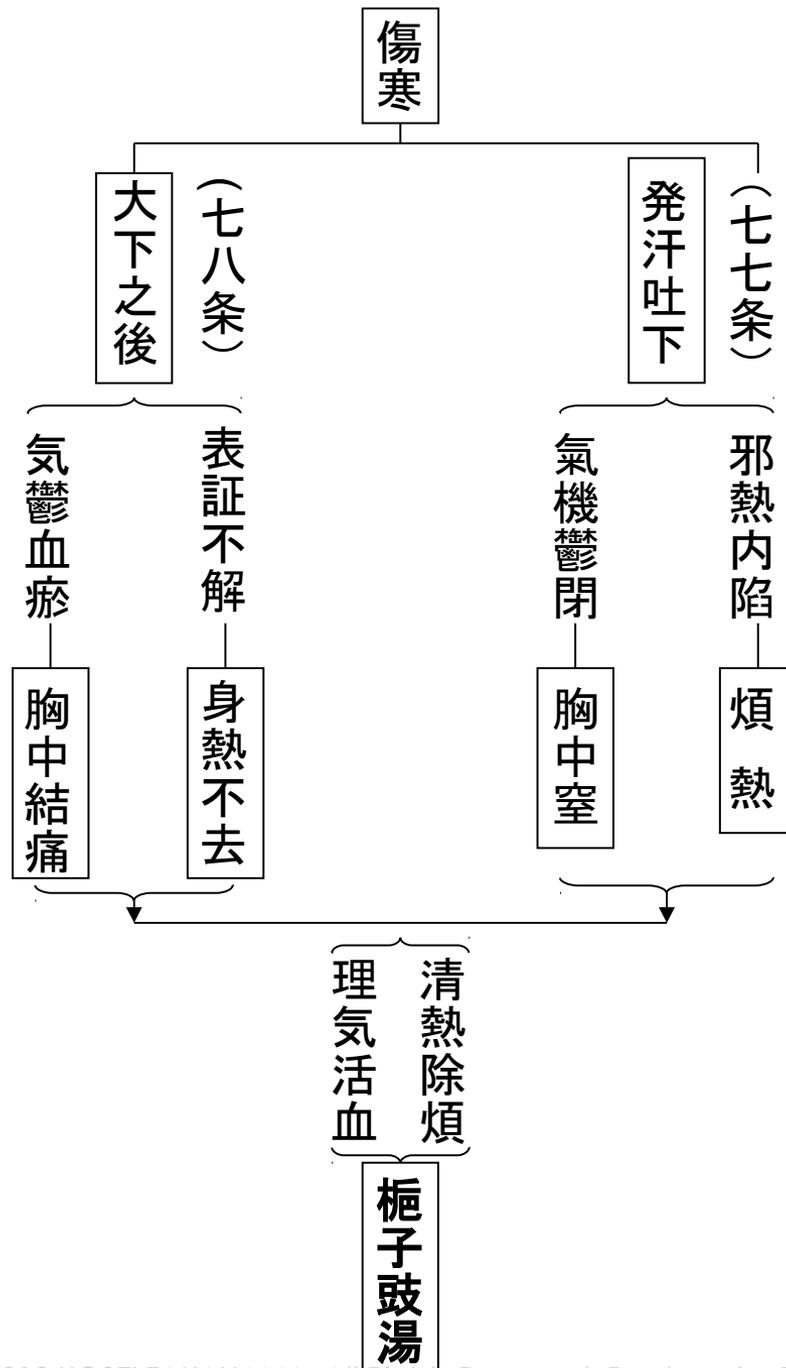
懊惱、梔子豉湯主之。若少気者、梔子甘草豉湯主之、

若嘔者、梔子生姜豉湯主之。

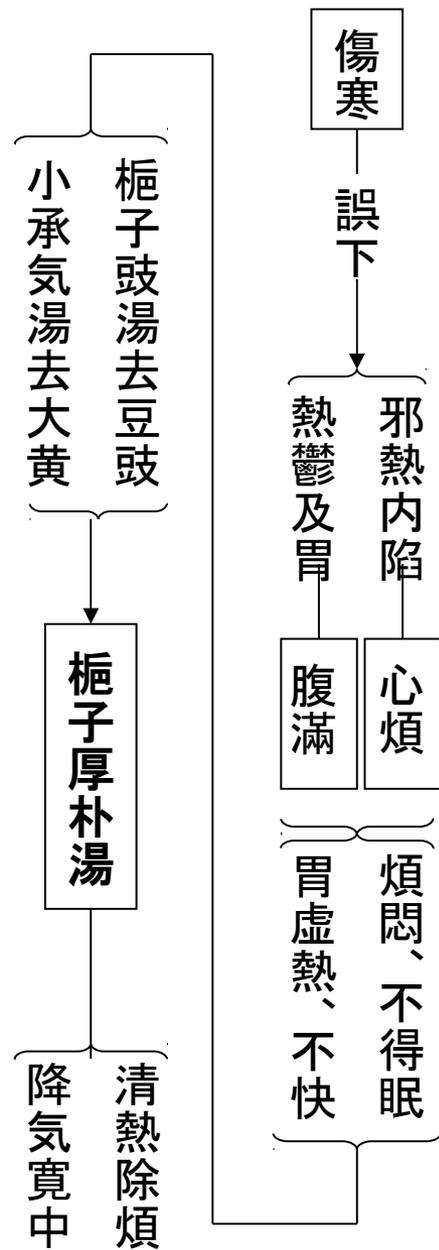


第七七条 発汗、若下之、而煩熱胸中窒者、梔子豉湯主之。

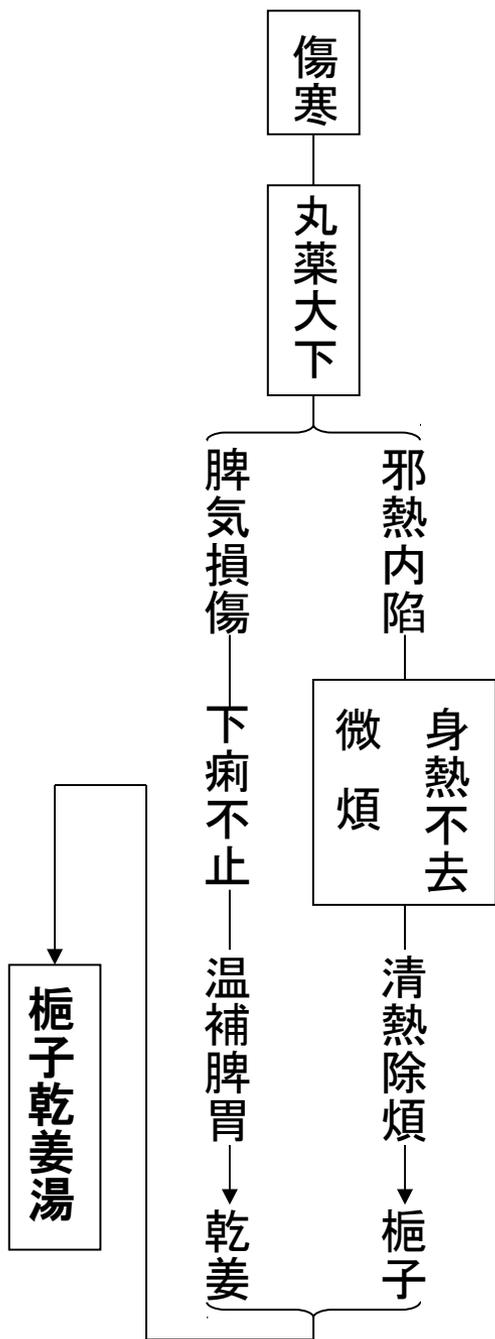
第七八条 傷寒五六日、大下之後、身熱不去、心中結痛者、未欲解也、梔子豉湯主之。



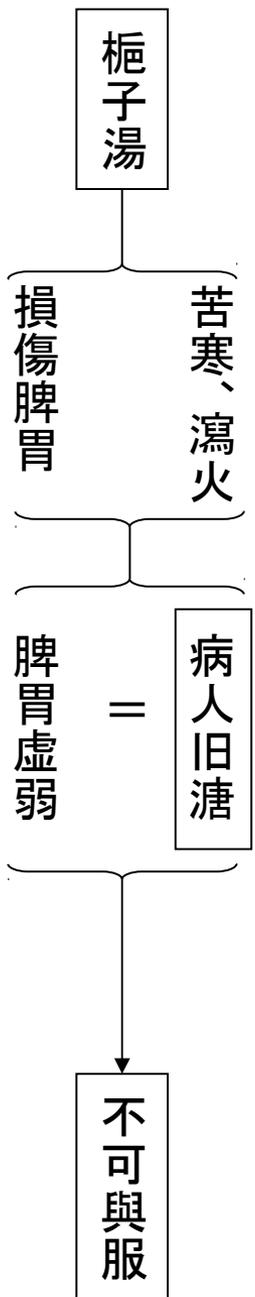
第七九条 傷寒、下後、心煩、腹滿、臥起不安者、梔子厚朴湯主之。



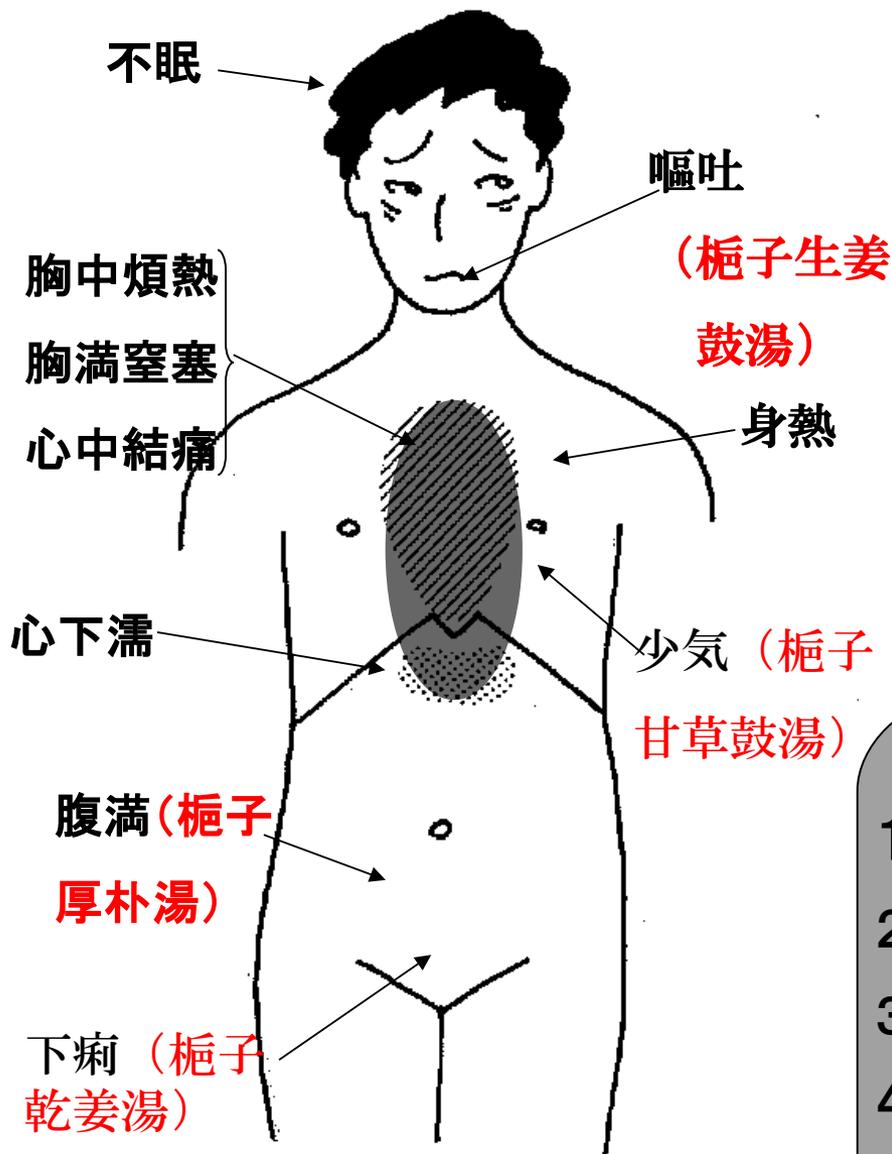
第八〇条 傷寒、医以丸藥大下之、身熱不去、微煩者、梔子乾姜湯主之。



第八一条 凡用梔子湯、病人旧微澹者、不可與服之。



梔子鼓湯の証*



方意

太陽病に発汗、吐、下を行った結果、傷寒の表証は残留して解されず、残余の邪熱が胸膈に内陷して虚煩証を生じたものである。虚煩証とは有形の実邪とは結合していない無形の熱邪が胸中に鬱していることに因って起る症状で、主な症状は身熱、胸中煩悶、焦燥感、不眠、胃部不快感、悪心などである。

梔子鼓湯類

- 1) 梔子鼓湯(身熱、虚煩、不眠、心中懊惱)
- 2) 梔子甘草鼓湯(虚煩、不眠、少気)
- 3) 梔子生姜鼓湯(虚煩、不眠、嘔吐)
- 4) 梔子厚朴湯(心煩、腹滿、臥起不安)
- 5) 梔子乾姜湯(大下後身熱、微煩)

(腎虛水泛証)

第八二条 太陽病發汗、汗出不解、其人仍發熱、心下悸、頭眩、身潤動、振振欲僻地者、真武湯主之。

太陽病
發汗
不解

消耗腎陽—少陰病

陽虛水泛

陽虛寒盛—陰盛格陽

真寒假熱
發熱

水氣凌心
心下悸

水氣上溢
頭眩

濁蒙清竅
身振

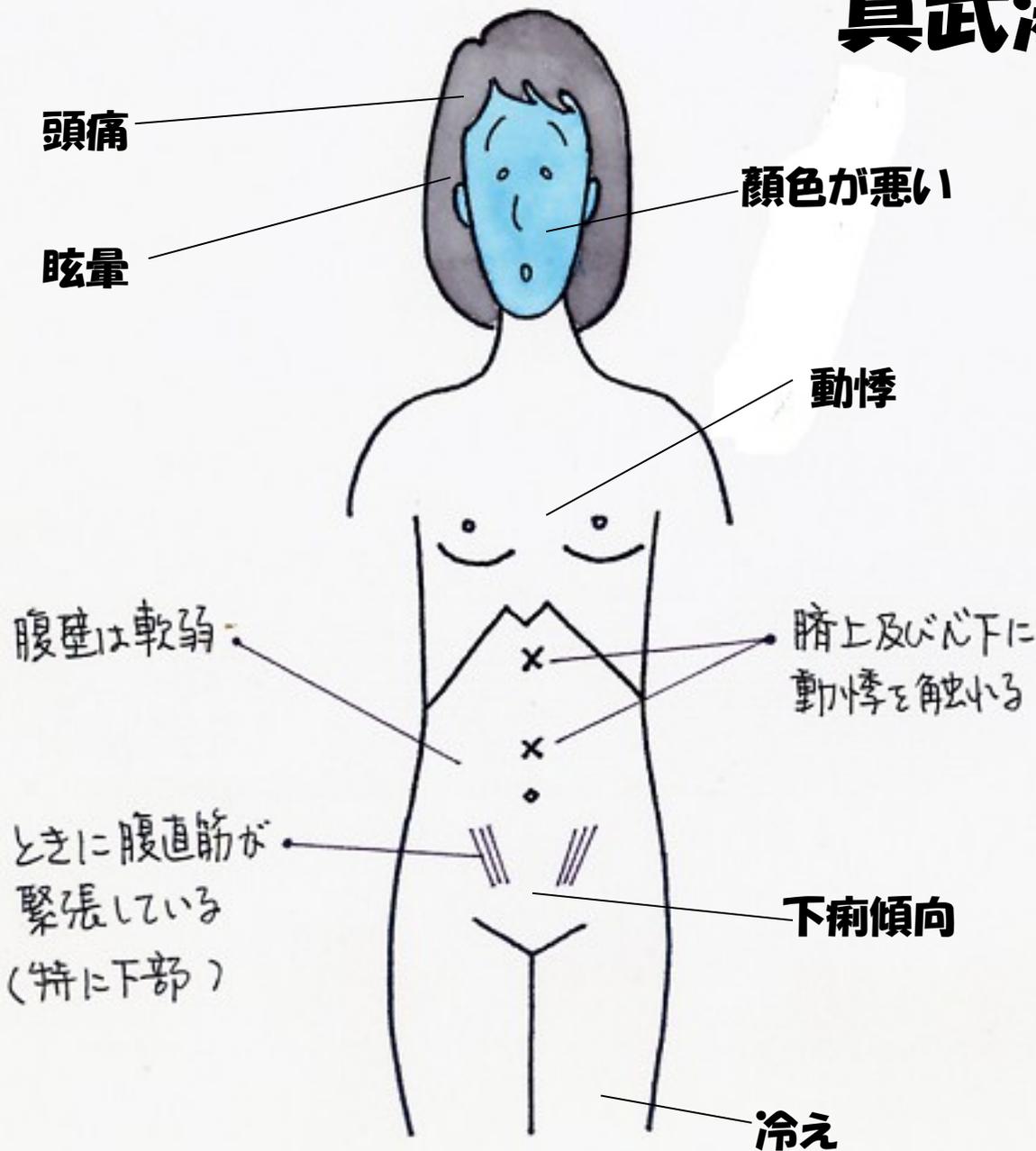
寒水浸潤
身潤動
振振欲倒

溫陽利水

真武湯

- 茯苓 健脾·利水·化痰
- 白朮 補脾·燥濕·利水
- 白芍 斂陰·緩和筋痛
- 生姜 溫經散寒·逐水
- 附子 溫補腎陽·散寒

真武湯の証*



方意

太陽病を発汗させ過ぎた結果、あるいは少陰病の経過中に、腎陽が損傷されて衰微すると、水は制御を失い全身に停滞あるいは氾濫して、多彩な症状を呈す。一方強い裏寒は陰盛格陽を生じ真寒假熱を呈す。本方は腎陽を温補し、寒陰を散ずると共に水気を行らす。

弁証のTrias

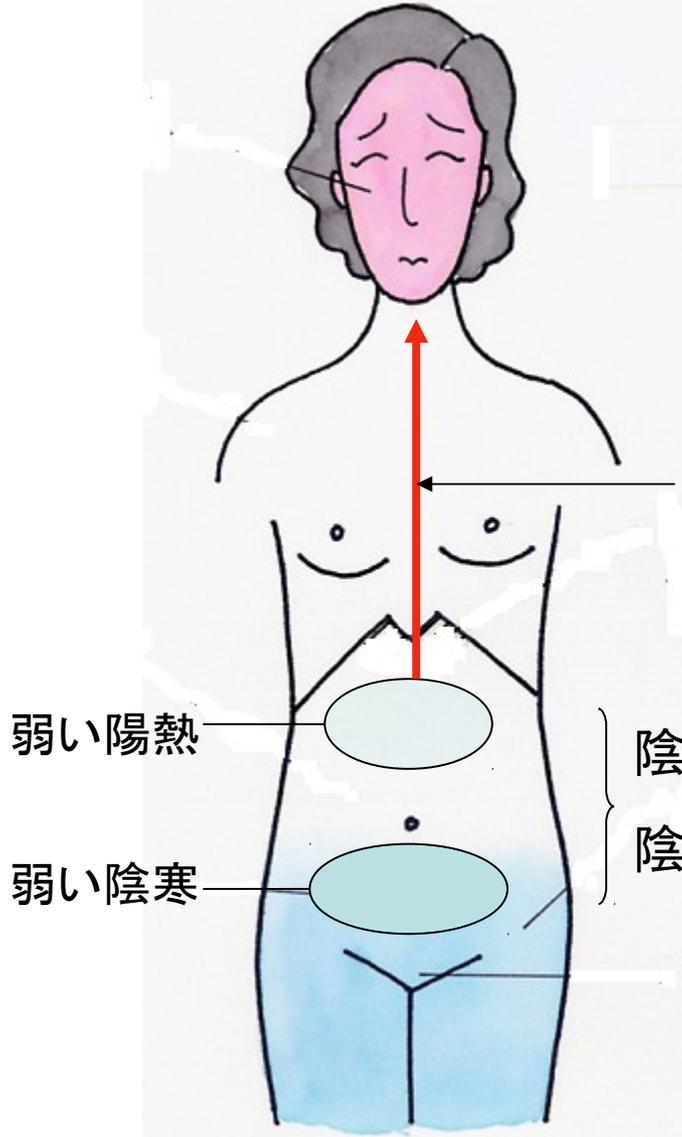
- 1) 冷え症で不活発
- 2) 浮腫傾向
- 3) 眩暈、動悸、下痢

眞寒仮熱証の虚陽上浮と陰盛格陽

茯苓四逆湯証

真武湯証

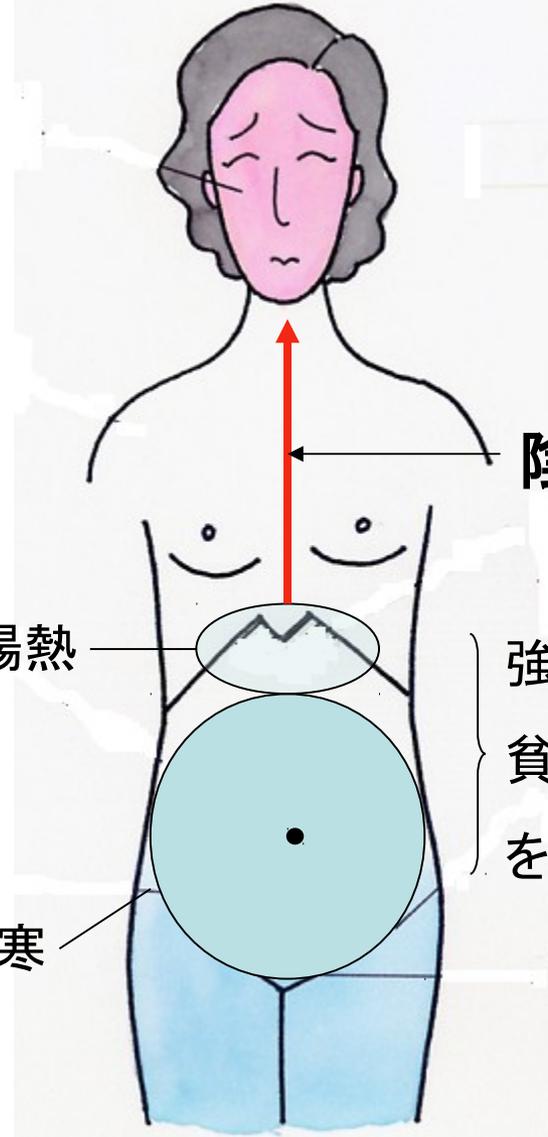
どちらも仮熱
が浮上して戴
陽証を呈す



虚陽上浮

陰も陽も弱く
陰陽が乖離

虚陽上浮



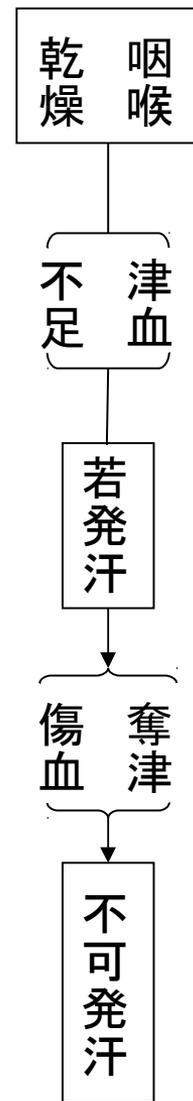
陰盛格陽

強い陰寒は
貧弱な陽熱
を拒み駆逐

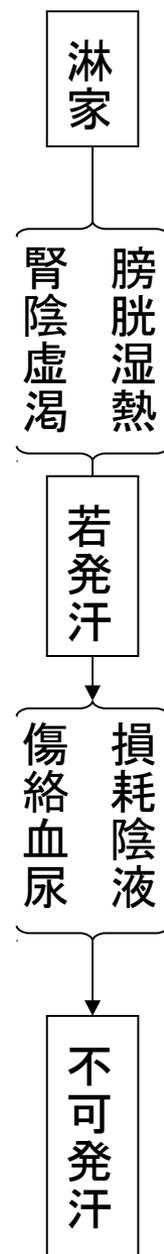
陰盛格陽

(不可発汗諸条)

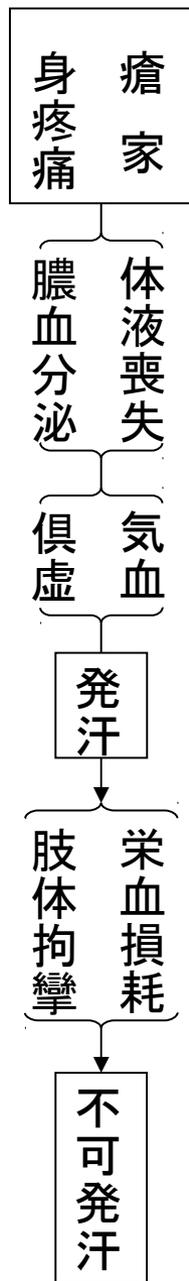
第八三条 咽喉乾燥者、不加発汗。



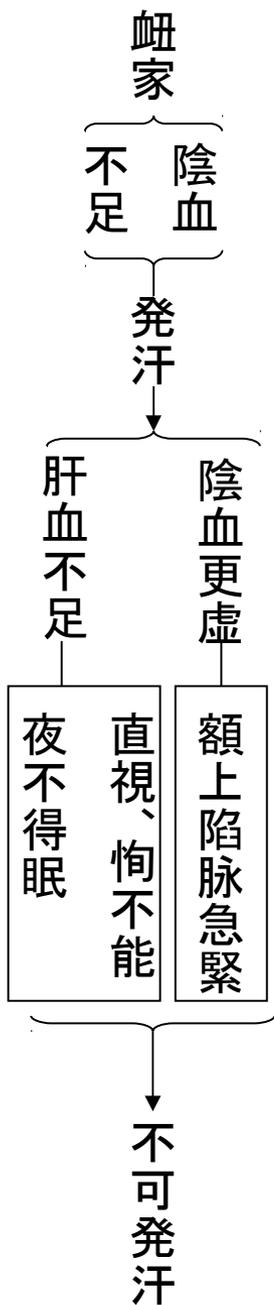
第八四条 淋家、不可発汗、発汗必便血。



第八五条 瘡家、雖身疼痛、不可発汗、汗出則瘻。



第八六条 衄家、不可発汗、汗出必額上陷、脉急緊、直視不能
恂、不得眠。



第八七条 亡血家、不可発汗、発汗則寒慄而振。

亡血家

陰血不足

発汗

陽氣虚損 — 温煦不足
陰血損耗 — 滋潤不能

寒慄而振

不可発汗

第八八条 汗家、重発汗、必恍惚心乱、小便已陰疼、與禹餘糧丸。

汗家

氣陰両虚

重発汗

氣血損傷 — 心不養

陰虚内熱 — 膀胱熱結

心乱恍惚
小便陰痛

禹餘糧丸

(処方内容不祥)

第八九条 病人有寒、復発汗、胃中冷、必吐蚘。

病人有寒

陽氣不足

重発汗

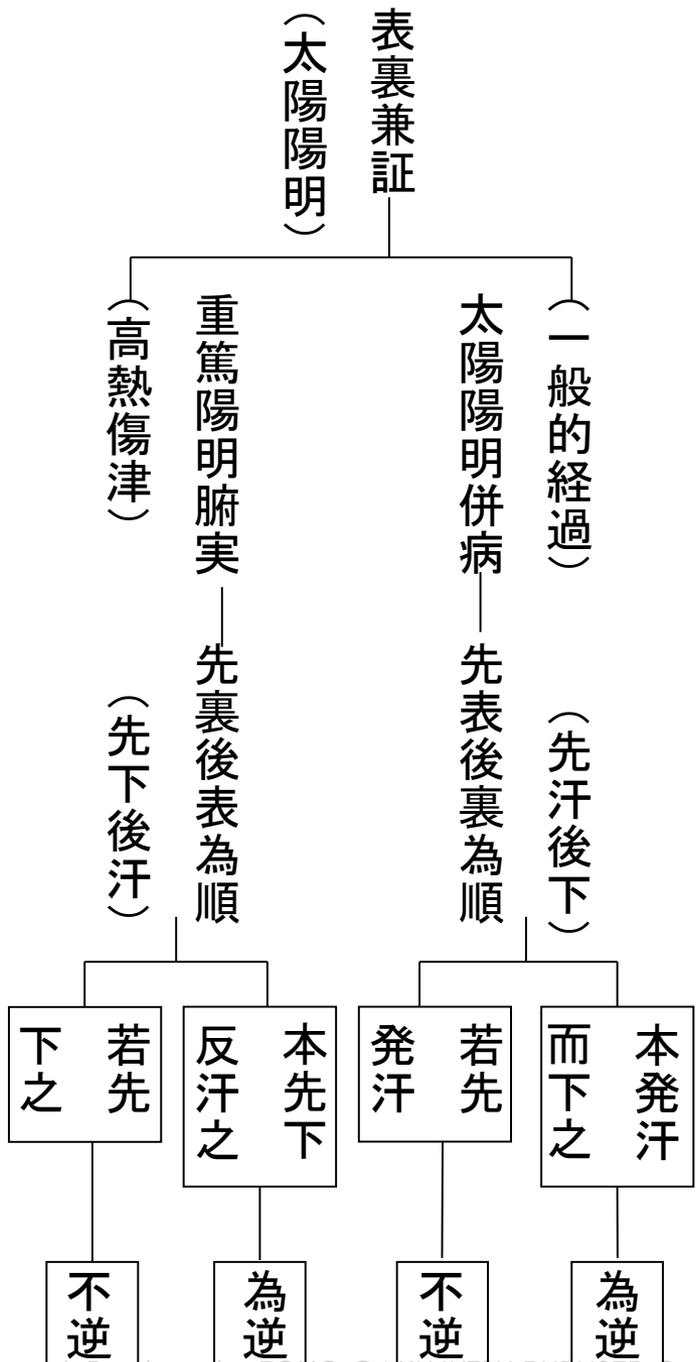
胃中冷

陰寒内盛
胃寒氣逆
蚘虫逃上

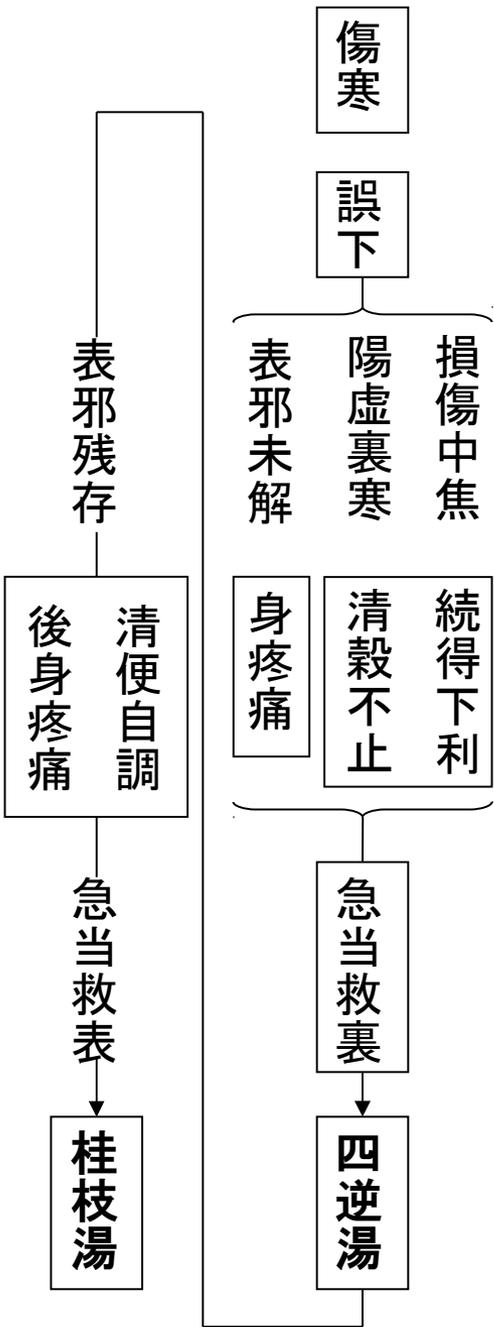
嘔吐
吐蚘

第九〇条 本発汗、而復下之、此為逆也。若先発汗、治不為逆。

本先下之、而反汗之、為逆。若先下之、治不為逆。



第九一条 傷寒、医下之、続得下利清穀不止、身疼痛者、急当救裏。後身疼痛、清便自調者、急当救表、救裏宜四逆湯、救表宜桂枝湯。



第九二条 発病後、頭痛、発熱、脈反沈、若不差、身体疼痛、
当救其裏。

発熱
頭痛
脈反沈

太陽少陰
表裏両感

拾証
捨脈

発汗

不差

病差

発熱頭痛
身体疼痛
脈仍沈

表邪解散
温経散寒

表邪未解
気血損傷
少陰裏寒

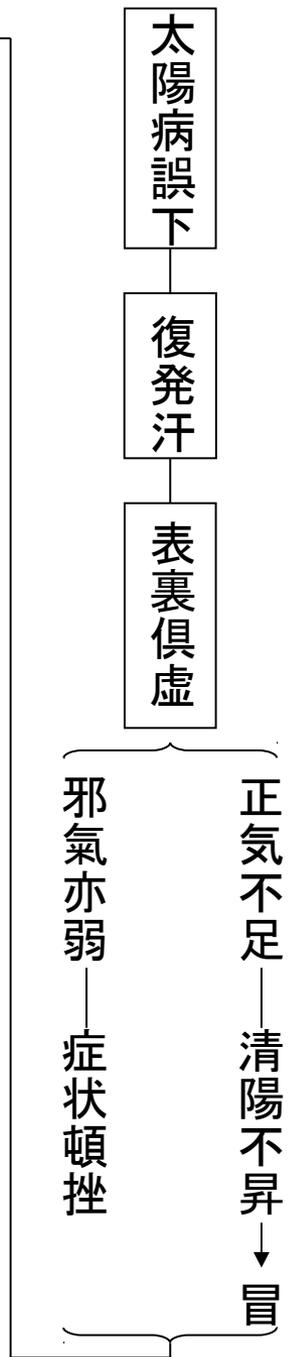
当救其裏

四逆湯

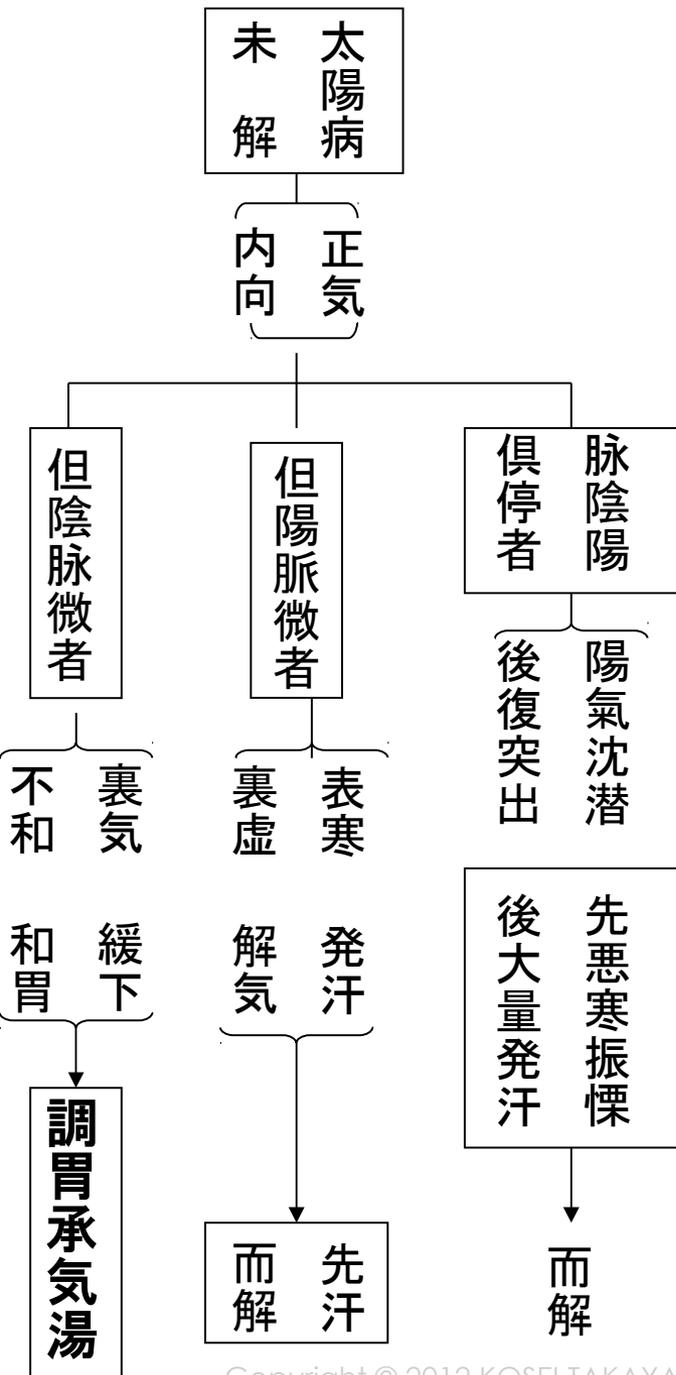
乾姜
附子
甘草

温陽祛寒
回陽救逆

第九三条 太陽病、先下而不愈、因復發汗。以此表裏俱虛、其人因致冒、冒家汗出自愈。所以然者、汗出表和故也。裏未和然後復下之。



第九四條 太陽病未解、脉陰陽俱停、必先振慄、汗出而解。但陽脉微者、先汗出而解。但陰脉微者、下之而解。若欲下之、宜調胃承氣湯。

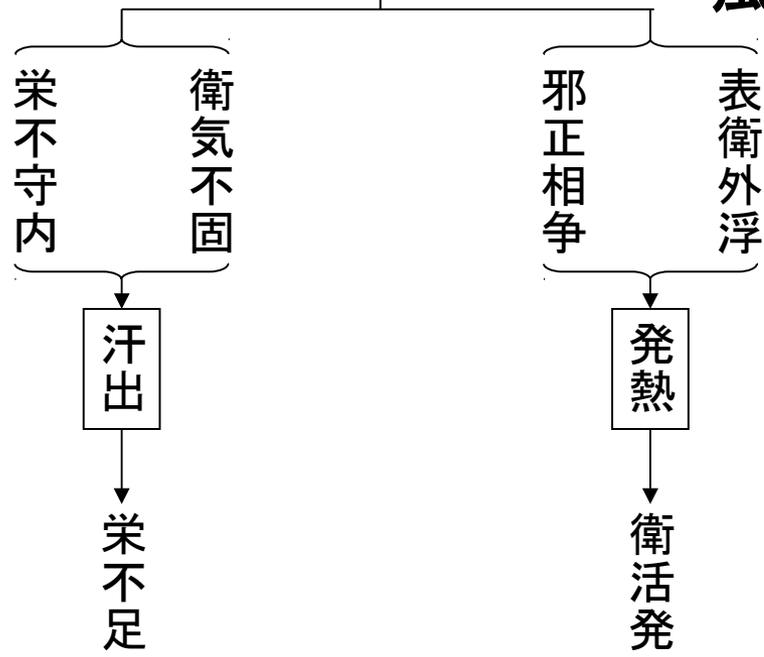


第九五条 太陽病、発熱、汗出者、此為榮弱衛強、故使汗出。

欲救邪風者、宜桂枝湯。

風 邪

太陽病中
(中風証)



桂枝湯

- 大棗
- 生姜
- 甘草
- 芍藥
- 桂枝